

## 所感 — この一年を顧みて

学校長 今泉 龍雄

同窓会々員の皆様におかれましては、ますますご健勝にてご活躍のことと存じます。皆様方の母校への御高配を深く感謝しております。また、この度は生活館建設基金に3千名余の多くの同窓生の方々から格別のご協力を賜り、皆様のご厚情に衷心より御礼を申し上げます。お陰をもちまして、建設計画もその実現に一步ずつ近づいております。特に関係する部活動等の生徒達は生活館の建設を心待ちにしていますので、早い時期に見通しをつけたいものと、責任を感じている次第です。

平成3年度もこの3月末で間もなく終わろうとしています。そこで、この1年を顧みてその所感を述べてみようと思います。

本校が県内有数の進学校として着実にその実績をあげていることは、前号に進路状況の報告として掲載されていましてご承知のことと思います。しかし、このことは普通科の優秀な進学校であれば当然の結果であります。むしろ私が生徒に強く望んでいることは、今の年代でなければできないことに自主的にしかも情熱をもって取り組む姿勢です。真摯な活動により感性を磨き、思索を深め、構想力と行動力を養い、友情の絆を育んでいくことができるのです。このための学校生活であり、授業であり、部活動であり、学級活動であります。生徒達はこの期待によく応えています。例えば、千南祭(学校祭)の夢の祭典(3年生の各クラスの創作劇)のために半年前から脚本に取り掛かりその準備をして、クラスの総力をもって入賞を目指し競い合っています。このようなほとぼる自主活動のエ

ネルギーは学校生活の至るところで見られ、学校行事等を見事に運営しています。また、他の進学校の先生方から「あなたの学校では学校不適應や登校拒否の生徒が実に少ないですね。」と感心されることがしばしばあります。これらの事象は、受験一辺倒にならないようにと心がけ、多様な生き方や価値観を尊重し生徒の自主的な活動を促進してきた本校の伝統的な校風によるものです。

さて、話は飛躍しますが、あのベルリンの壁の崩壊に象徴される東西冷戦の終結は、長年にわたる共産主義と自由主義的資本主義のイデオロギー対立の優位性の結果というより、むしろシステムの効率のよしあしに起因しています。つまり「自由」の余地がないものはその活力を失い社会は停滞し国家の競争力を喪失するという事実がそこに示されているのです。一面的な見方かもしれませんが、あらゆる組織、とくにともすると管理的な傾向が強くなりがちな教育現場ではこのことを自戒しなければならないと思います。

今世界は湾岸戦争後の重荷をかかえながらも、摩擦から協調の時代へと大きく転換しています。80年代の「国際化」も90年代に入りEC政治統合の動きに見られるように文化の差異を越えた共同体の構想に向かっています。学校教育においても、自国の文化の認識を基盤として異文化との相互理解と融和を、日常生活のレベルで体得していく場を構想しなければなりません。今後も社会に開かれた学校教育を目指して努力する所存ですので、同窓会の皆様のご協力をいただきますようお願い申し上げます。

## 激動の世界と日本の役割

千野 忠男

今、世界は戦後最大の激動期を迎えている。先づ、米ソ超大国の時代は完全に幕を閉じた。大正の終わり頃から約70年続いたソビエト社会主義共和国連邦が建国以来の危機に直面している。ラジオモスクワの放送によれば、一昨年ソ連国民の34%が現体制を支持したが、昨年末の世論調査では僅か14%の支持しかなかったという。ソ連を構成する15の共和国は昨年3月のリトアニア共和国の独立宣言を皮切りに、15共和国すべてが独立または主権宣言をしており、連邦国家としての体制を死守したいソ連政府は、ついにバルト三国に武力介入し、流血の惨事を引き起こした。バルト三国

の一つ、ラトビア共和国にソ連軍が武力介入し、死者が出たというニュースがニューヨークで開催中の日本を含む七カ国蔵相会談のメンバー達の耳に入ったのは1月20日の夕方であったが、このため、この会談で予定されていたソ連経済支援問題の論議は何らの進展を見ず、皆がソ連の武力介入に憂慮の念を表明した。

もともとスターリンがポーランドに侵入するときに、ヒットラーとの間で独ソ不可侵条約を結び、その付属議定書で、モロトフとリップペントロップが、バルト三国をソ連に併合すると一方的に決めてしまったものであってこのような事情は、バルト三国だけでなく、い